

大学の「役職」と挨拶のミッション

関西大学法学部教授 高作 正博

大学というところは、役職者に職掌上の職務だけでなく、様々な付随的職務が割り振られる職場である。その中で最も頭を悩ませる（私見）のが挨拶。式典での挨拶やパンフレット類の挨拶文の掲載など、対応すべきミッションは多い。すぐにネタは底をつき、新しい話題を求めて「旅」に出る。「旅」といってもこのご時世、人流抑制が求められる状況では、簡単に出かけるわけにもいかない。仕方なく書物の森に分け入ることとなる。

ここで紹介したいのは、阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男』（ちくま文庫、1988年。初出は、平凡社、1974年）である。小さい頃に絵本か何かで読んで「ハーメルンの笛吹き男」は、私にはおとぎ話として記憶に残る程度のものであったが、もともとはグリム兄弟の『ドイツ伝説集』に収録された伝説であると知る。阿部は、「伝説 Sage とはおとぎ話・メルヘンと違って本来何らかの歴史的事実を核として形成され、変容していくもの」（23頁）と述べ、その核となる歴史的事実を求めていく。

中世資料の数々を調査しながら、阿部は、一つの事実に到達する。「1284年6月26日、ハーメルンの子供たち130人がカルワリオのあたりで行方不明になった」（34頁）事件である。しかし、話はここで終わらない。130人の子供たちがなぜ行方不明になったのか、また、それがどのような経緯で今日に伝わる伝説に変貌したのか、という謎を解明していくのである。その際、舞台となったハーメルン市の当時の政治的・経済的・社会的状況、市民生活の実態、子供たちを取り巻く環境等、様々な観点から疑問を解き明かそうとし、また、「130人の子供たちの失踪」事件の原因である「笛吹き男」について、遍歴芸人の社会的地位の低さや差別の実態からその実相に迫っており、怒涛の展開で読者を惹きつける。

この書物の興味深いところは、「ハーメルンの笛吹き男」伝説に関する先行研究を渉猟し、「130人の子供たちの失踪」事件の原因をめぐる様々な解釈論を検討していく方法論にある。ある事象を研究対象として取り上げる際に、その原因や背景に迫っていくスタンスは、歴史研究だけでなく、社会科学にも共通の研究方法である。法的・政治的課題の解決を図る際、「現在」から「過去」へと視点を移動させ、課題の原因や背景を分析して、理論化・立法化を図る。その上で、課題解決の「未来」へ向けた政策を提示する。歴史・理論・政策という学問体系は、過去・現在・未来の間の視点の移動と密接に結びついている。

同じく、現在から過去、そして未来への視点が求められるのは、今回のロシア軍による武力行使への見方である。2022年7月4日の本稿執筆時、未だウクライナに対するロシア軍の軍事侵攻は止まっていない。社会科学の学問としてこの問題に向き合う場合には、軍事侵攻の原因や背景、特に、旧ソ連解体後の民主化と、それがロシア国内ないしプーチン大統領にもたらした影響を探る必要がある。その点で、Ivan Krastev, Stephen Holmes, *The Light that Failed: A Reckoning*, Allen Lane, 2019（イワン・クラステフ、スティーブン・ホームズ、立石洋子訳『模倣の罌——自由主義の没落』（中央公論新社、2021））は、重要な視点を提示しているように思う。

クラステフとホームズによれば、コソヴォ紛争に際してのNATOの「人道的介入」（1999年）やコソヴォの国家承認（2008年）は、「鏡映し」としてのロシアの対外政策をもたらした。すなわち、人権保障を理由とするグルジア（現・ジョージア）の南オセチアとアブハジアの占領と独立の承認（2008年）である。これは、ロシアによる西側の「模倣」を示すものである。西側諸国が支配する（と、プーチン大統領が考える）国際秩序に対する反発や挑戦を前にして、これからの国際社会をどのように構築していくべきなのか、人類の英知が求められる。法律学や政治学を学ぶ学生には、是非とも大きな課題に取り組む気概を求めたい。そのような願いを込めながら、今年も新生を迎えたところである。